

## 「教育は人なり」

261015

「教育は人なり」を感じた2つの出来事について触れます。

一つ目は、先週火曜日に行われた初任者の森田航太郎先生の授業で感じたことです。自分が書いたエッセイを教材を通して学んだことを生かして、より良いものにしていくポイントを学ぶ授業でした。その参考例として森田先生自身のことを題材にした見本を2通り示して、どこがどう良いのかに気づかせようと「きらり」を行いました。私が心揺さぶられたのは、その授業の内容ではなく、その例文として示したエッセイの内容でした。自身の祖父とのやりとりを心温まるエピソードを交えており、「ええ先生になれよ」と祖父に励まされてがんばっている森田先生の生き様、人柄、温かさがにじみ出ていました。このエッセイを読んだ生徒たちは、間違いなく森田先生の大切にしていること、考え方など人間性に触れて、先生に対しての見方や意識が変わったと思います。

（前略）診断を受けたあと、祖父に会いに行った。寡黙で、ましてや病気で弱っている祖父に話しかけてもきっと反応はない。そう思って話しかけると、意外な言葉があった。「勉強して、ええ先生になれよ。」祖父から受け取った、もしかしたら初めてだったかもしれない温かい言葉。少しびっくりしながらも、胸の奥が熱くなった。それから祖父に会いにいくたび、「勉強がんばって、ええ先生になれよ。」という言葉が別れ際の言葉となった。祖父が亡くなる数週間前。最後に会ったとき、いつもの言葉はなかった。祖父はただ黙って私の手を取り、ぐっと力を込めて握手をした。いつもの祖父がそこにはいた。ただ言葉はなくとも、祖父の想いは、その手のひらに込められていたと思う。私は、今、教師になることができた。「ええ先生」になれたかといえば、まだまだこれからな気はするが、祖父から受け取った、手のひらに込められた最後の言葉を思い出しながら、今日も教室へ向かう。

二つ目は、幸中祭1日目の有志発表の場です。3年生男子の発表グループが、仲間の一人が当日、急な欠席でその出し物ができない窮地に立たされていました。主役の一人であり、その役がいないと寸劇そのものが成り立たない役でした。私も「一緒に出てくれませんか？」と声を掛けられましたが、とてもとても自身がなく、申し訳ないと思いながらも断りました。どうするのかなと気にはしていましたが、しば

らくしてふと2階のギャラリーのスポットライト付近で、鈴木菜都子先生が、3年生男子からレクチャーを受けながら、動きやセリフを必死に覚えている様子が目に入ってきました。まさかとは思いましたが、どうやら菜都子先生は彼らの依頼を受け入れて、困っているなら私が一肌脱ごうと出演することにしたのだと気づきました。舞台に立った菜都子先生は、生徒たちに溶け込んで、場の雰囲気に合わせてがんばって演技していました。観客の生徒席からは、笑いと声援の声があがっていました。出演後、その3年男子生徒たちに声を掛けると、「菜都子先生が出てくれたお陰でやり切れた。本当にありがたかった」と感謝し、嬉しそうに話してくれました。

2つの出来事に共通していることは、これらの取組によって2人の先生方の人柄、人として大切にしていることが、生徒たちに伝わっているということです。自分をさらけ出し、素の自分で生徒の前に立つ姿から、生徒たちは、それまで以上に親近感を覚え、尊敬し、その人から学ぼうとします。

教材をどう教えるかを突き詰めて、研究していくことが私たちの役目ではありますが、その教材をどんな人間が教えるのかも生徒たちは観ています。「誰が教えるか」によって、生徒のなかに入っていくものは、量も質も深まりも違っていきます。

先生方がそれぞれの人柄を発揮し、自分の持ち味を出しながら生徒に接して指導しているように、初任者の2人が、教員としての技量をどんどん高めていき、人間性をさらに磨いて生徒たちの前に立ってくれることを期待しています。

「教育は人なり」を改めて感じさせてくれた出来事でした。